

## 「天主実義」の研究（一）：序説と首篇現代語訳

柴田，篤  
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/2328458>

---

出版情報：哲學年報. 54, pp.69-86, 1995-03-20. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 『天主実義』の研究（一）

—序説と首篇現代語訳—

柴田 篤

## 序説

西洋人による本格的な中国文の書物は、明朝末期のイエズス会を中心としたカトリック（天主教）伝道の中で数多く著されている。その代表的著作が、イタリア人イエズス会士マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、一五五二—一六〇〇）による『天主実義』である。中士（中国の学者）と西士（西洋の学者）との問答の形をとる。西洋思想の一つの支柱であるキリスト教と中国思想、殊に儒学思想との対話が展開されており、中国思想史研究においても極めて重要な資料といえることができる。『天主実義』は、明末から清朝にかけての中国のみならず、李氏朝鮮や江戸時代の日本にも多大な影響を与えた。<sup>(1)</sup> その成立や版本については、従来様々な研究がなされており、筆者もその成立事情と性格については別稿において若干の考察を行った。<sup>(2)</sup>

『天主実義』は、一六〇三年に出版され、奉教士人李之藻が一六二二年に刊刻した『天学初函』理編にも収められたほか、明末から清朝末期にかけて幾度も出版された。また、ヨーロッパにもたらされ、翻訳された。その後、いくつかの形で翻訳や注釈がなされているが、管見の及ぶ限り、日本語・中国語・英語・韓国語による次のようなものがある。

(1) 小島準治訓点『天主實義』(東京開世堂、一八八五)。

(2) 佐伯好郎著『支那基督教の研究』3 明時代の支那基督教「第七章 利瑪竇著『天主實義』とその解説」

(春秋社、一九四四)。

(3) 後藤基巳著『天主實義』(中国古典新書「明德出版社、一九七一)。

(4) 劉順徳訳註『言文対照 天主實義』(台湾光啓出版社、一九六六)。

(5) 『THE TRUE MEANING OF THE LORD OF HEAVEN』馬愛徳主編、藍克實、胡國楨訳註

(The Institute of Jesuit Sources St. Louis, 一九八五)。

(6) 「천주십의」(天主實義)、神学叢書二三卷、이수용<sup>イ・ス・ユン</sup>訳、분도출판사(フンド出版社、一九八八)。

近年、中国や日本においても、明清期の天主教をめぐる研究が盛んに行なわれてきているが、その出発点となる原典は、やはり『天主實義』であると言える。しかし、今日まで、『天主實義』全体の完全な口語訳は作られていない。そこで、以下に現代語訳を試みるものである。本稿では、首篇を取り上げる。なお、同じくリッチが著した『畸人十篇』の内容との比較も重要であるが、今回は触れず、別稿に譲る。

### 【註 釈】

(1) 以下の諸論考を参照。

平川祐弘著『マッテオ・リッチ伝』(『東洋文庫』平凡社、一九六九)。

同上「北京におけるマッテオ・リッチ」(1)~(13)『丸善『学燈』、一九八二—二二—一九八三—二二)。

同上「東西思想史上のマッテオ・リッチ」(1)~(12)『同上、一九八七—一九八七—二二)。

同上「利瑪竇の余波とリッチの余波」(1)~(9)『同上、一九八九—一九八九—二二)。

小野忠重編『マテオ・リッチと支那の科学』(双林社、一九四四)。

(2) 拙稿「『天主實義』の成立」(『哲学年報』第五十一輯、一九九二)、「天主教と朱子学」『天主實義』第二篇を中心として」(同

上第五十二輯、一九九三)を参照。関連する従来の研究としては、次のようなものがある。  
佐伯好郎著『支那基督教の研究』3 (前掲)。

後藤基巳著『天主実義』(前掲)。

吉田公平「利瑪竇の『天主実義』について」(『神観念の比較文化論的研究』講談社、一九八二)。

福島仁「新編天主実録」とその改訂に関する資料の諸問題」(『名古屋大学文学部研究論集』哲学三、一九八七)。

顧保鶴著「天主實義校勘記」(国防研究院版『天主實義』代序、一九六七)。

方豪著「天主實義之改竄」(『方豪六十自定稿』下冊)。

黄炳炎著「利瑪竇的神学著作」(『天主實義』簡介)、『世界宗教資料』一九八二)。

(3) 前記以外、次の諸論考を参照。

羅光著『利瑪竇傳』(台湾学生書局、一九七九)。

劉俊餘・王玉川訳『利瑪竇全集』1 利瑪竇中国伝教史(上)(台湾光啓出版社、一九八六)。

同上 同上 2 同上 (下)(同上)。

羅漁訳 同上 3 利瑪竇書信集(上)(同上)。

同上 同上 4 同上 (下)(同上)。

存萃學社編集『利瑪竇研究論集』(崇文書店、一九七二)。

藝舟著「利瑪竇在中國」(『旅游』一九八〇—三)。

楓雲著「利瑪竇与『万国全図』」(同上)。

王慶余著「利瑪竇—近代西方文化使者」(『百科知識』一九八〇—三)。

謝方著「利瑪竇及其訳著」(『学林漫録』一九八一—三)。

孫尚揚著「明末天主教與儒學的交流と衝突」(文津出版社、一九九二)。

【凡例】

- 一、底本は、学生書局「中国史学叢書」所収明版影印本『天学初函』による。
- 二、便宜上、中士と西士の各発言の冒頭に、順に番号を付した。中士が奇数、西士が偶数となる。
- 三、訳語については、以下の点に注意した。

- (1) 「天主」は、現在、日本のカトリック教会においては「神」と訳すが、原語のまま用いた。
- (2) 「中土」は中国の士大夫即ち儒学者を、「西土」は西洋の学者即ち修道士、つまりリッチを指すが、煩瑣になるので原語のまま用いた。
- (3) 儒学、殊に朱子学の概念・用語については、そのまま用いたが、必要に応じて説明を施した。
- (4) その他の表現については、できるだけ平易な現代語表記を心掛けた。
- 五、口語訳に当っては、前記の注釈書等を参考にしたが、特別な場合を除き、一々注記はしなかった。

## 現代語訳 『天主実義』 上巻

首篇「天主が天地万物を創造して、それらを主宰し維持することについて」

1 中士が言った、「そもそも自己を修養する学は、<sup>(1)</sup>世間の人々が尊ぶ功業<sup>(2)</sup>です。誰でも鳥や獣のようにただ生命を持つていただけでよいと思わない者は、必ず自己を修養する学に力を尽くすものです。自己を修養するといふ功業が完成してこそ、君子とすることができます。「そうでなければ」他の能力がどんなに優れていても、結局小人であることを免れません。<sup>(3)</sup>「自己を修養して」徳を完成させることこそが真の幸福で、<sup>(4)</sup>徳のない幸福を誤って幸福と言っても、実際は災禍があるだけです。世間の人々が道を歩くのは、どこかに到達するためです。ですから、その道を整備するのは、その道自体のためではなく、その道の到達点のためです。自己を修養するといふ私の道は、一体どこに到達するのでしょうか。この世で到達する所については、おおよそ明らかですが、死後のことについては、どのようなものであるか解りません。先生は世界を巡って天主の教えの根本を語り伝えて、人々が善を行うよう導いておられるそう

ですが、どうか御指教を頂きたいと存じます」と。

2 西士が答えて言った、「お言葉は感謝しますが、天主のどのようなことについてお尋ねになりたいのでしょうか」と。

3 中士が言った、「あなたの教え(天主教)は、道理が深遠であつて、一言二言で言い尽くせるものではないと聞きます。ただ、あなたのお国ではもっぱら天主を信奉し、天主は天地万物を創造しこれを主宰し維持する方であると述べています。「中国人である」私は、「そのことに」聞き慣れておりませんし、「中国の」先賢が全く語っていないことです。どうか「そのことについて」私に教えて頂きたいと思ひます」と。

4 西士が言った、「天主の教えは一人とか一家とか一国とかの教えではありません。西から東まで、諸大国は皆この教えを習い守っています。聖人や賢人が伝えてきたことは、天主が天地を創造し人類や諸物を生み出してから今まで、聖書や「その」註解でもって伝承してきたことで、疑いの余地がありません。ただ、あなたの国(中国)の学者(儒者)は他の国に行くことがほとんどありません。だから、私たちの国や地域(ヨーロッパ)の言語を理解して、その人間や諸物について熟知することができません。私は、天主の普遍的な教えを翻訳し、それが真実の教えであることを証明しようと思ひます。「ただし」信者の数が多く賢いこととか、聖書や「その」註解の内容などには取りあえず触れず、先ず拠り所となる道理を挙げて見ましょう。そもそも人が鳥や獣と異なる最大の理由は、知性にあります。<sup>(5)</sup>知性は物事の是非を判断し、真偽を弁別するもので、道理を欠いたもので欺くことはできません。鳥や獣は、知覚したり運動したりする点は人とほとんど変わりませんが、愚昧であつて物事の因果や内外の道理を明らかにすることはできません。そのため、飲食したり、時期が来ると交配して同類を繁殖させようとしたりするだけです。人は万物を超越しており、その内面に靈魂を備え、<sup>(6)</sup>外にある物事の道理を見分け、現象を観察しては、その原理を認識し、現状を捉えては、その原因を知ります。だから、この世の苦勞を厭わずに専心努力して道を修め、死後の永遠の安楽

を得ようとする事ができるのです。知性が明らかにしたことについては、むりやり真実でないものに従わせることはできません。「知性が明らかにした」道理からして真実であるものに対して、私はそれを真実であるものとしないうけにはいきませんし、虚偽であるものに対しては、それを虚偽であるものとしないうけにはいきません。知性の自分自身に対する関係は、太陽が世界に対してすべてのものを明らかにするようなものです。知性が正しいとする道理を捨てて、他人が伝えるものに従うのは、何かを探し求めるのに、光を遮まげつて、ともしびを持つてくるようなものです。今、あなたが天主の教えの根本を聞こうとされるならば、私はずばりこの道理をもつて答えましょう。ひたすら道理によつて解析しましょう。たとえ異議があつても、分析を尽くして自分を欺くことがないようにしましょう。このことは、天主の正しい道理、普遍的な事柄を論ずることですから、個人的な謙遜でやめる訳にはいかないことです」。

5 中士が言った、「どうして問題がありませんか。鳥は翼を使つて山や林を翔びまわります。人は道理を受けて物事を窮めます。だから、議論は専ら道理を尊ぶものです。道理の本質と作用は非常に広く、聖人や賢人でも理解できないことがあります。一人では解らなくても、一国の中には解る者がいるかも知れませんし、一国では誰も解らなくても、千国の人の中には解る者がいるかも知れません。君子は道理を根本とします。道理があれば〔ものごとは〕順調に行われますが、道理がなければ順調には行われません。誰がこのことに異議を唱えましょう」と。

6 西士が言った、「あなたは先ず天地万物を創造し、常にこれを主宰する者について、質問なさいました。私は世の中にこれより明白なことはないと思います。誰でも目を上げて天を觀ますし、その際、黙つて『天の中にはきつとこれを主宰する者がいるに違いない』と感嘆しない者はいません。その『主宰する者』こそ天主です。西方の我々の国で『デウス』と呼んでいる方がそれです。あなたのために、ここで特に二、三の理由を挙げてそのことを証明しましょう。

第一の証明。学ばないでも〔自然に〕できる能力を良能と言います。今、世界中の国〔の人々〕にはそれぞれ自然の心が備わっています。互いに教えあわなくても皆、最高に尊い唯一のものを敬います。災難に遭つた者は、慈愛深い父母を求めるように、悲しみ叫んで〔最高に尊いものに〕救いを求めます。悪を行う者は、敵国を怖れるように、びくびくして〔最高に尊いものに〕怖れおののきます。これは、最高に尊いものが存在して世の中の人々の心を支配し、自然に尊ぶようにさせているに違いないのです。

第二の証明。魂もなく知覚もない物は、本来の居場所から、一定の法則に従つて自分で移動することはできません。一定の法則に従つて動くには、必ず知性を持ったものの外からの助けを借りなければなりません。あなたがもし石を空に向つて投げたり、水の上に置いたりしたら、石は必ず下に向つて地に落下し、それ以上動きません。石はもともと落下するもので、空と水は石の本来の居場所ではないからです。風が大地より吹き起こるのは、本来の場所から自分で動くものです。しかし、〔それは〕偶然や目茶苦茶な動きであつて、一定の法則に従つたものではありません。太陽や月や星は天空に並んでおり、それぞれ天空を本来の居場所としています。しかし、実際には魂もなく知覚もないものです。今、上天は東から巡り、太陽や月や星の天空は西から巡つてこれを迎えます。その進み方はそれぞれの法則に従い、それぞれの場所に安定しており、いささかもずれることがありません。もし尊い主宰者が天空において〔太陽や月や星の運行を〕秩序正しく主宰してないのであれば、乱れないことがありましようか。たとえば舟が川や海を航行する際、上から強風、下から大波がやってきても、転覆の怖れがないようなものです。〔それは、そこに〕人の姿は見えなくても、舟の中に舵かたを執る勝れた船頭がいて、棹をさして舟を操り、しつかり舟を持ちこたえさせているので、流れに乗つて無事に運航することができます、と知っているからです。

第三の証明。動物には本来知覚は備わっていますが、靈性は備わっていません。靈性を持つ者のように行動する場合があるのは、靈性を持つ者がそれを導き動かしているからです。試しに鳥や獣の類を覗いてみると、〔それらは〕も

ともと頑迷で靈性を持ちません。しかし、餓えては食べものを、渴いては飲みものを求めることを知っており、いぐるみを畏れては大空に舞い上がり、罨に驚いては山沢に逃げ込みます。「また、我が子に」食べものを口移しに与えたり、足をかがめて乳を飲ませたりします。「このようにして」すべて我が身の安全を守って子を育て、危害を防いで利益を守ることは、靈性を持つ者と何ら異なるどころがありません。これはきつと尊い主宰者が存在して、秘かに彼らに教えるからこそ、そのようにできるに違いありません。たとえば、目の前を何万何千本という矢が飛んで行き、すべてが的に命中するのを見たら、直接弓の弦を張っている姿を見ていなくても、必ず「そこに」弓の名手がいて矢を發しており、だから的から外れることがないのだということが解るようなものです」と。

7 中士が言った、「天地の間の物は、数も多く複雑ですが、確かに主宰するものが存在します。しかし、その主宰者が万物を創造し変化させたということは、どのようにして証明できますか」と。

8 西士が言った、「およそこの世の多くの事柄は、造物者によって主宰されています。「万物それぞれの」道理は別々のようですが、万物を創造した根源を論じるならば、決して別々のものではありません。そうではありませんが、これもまた二、三の理由を挙げて解明いたしましょう。

第一の証明。およそ物は自分で「自分に」成ることはできません。必ず「自分の」外に作るものがいて、成り立つのです。楼台や屋敷は自分で「自分を」作ることはできません。常に大工の手によって出来上がるものです。このことが解れば、天地が自分「の力」で出来上がることはなく、必ず「それを」作るものが存在するということが解ります。その「外にあつて」作るものこそが私の言う天主です。たとえば、銅で鑄造した小さな球に、太陽や月や星座、山や海や万物がすべて備わっているようなものです。勝れた職人がその銅を鑄造したのでなければ、自分で出来上がることはありません。まして、天地のような大きなものにおいては、昼と夜が運り行き、太陽や月が光り輝き、星座が広がり、山は草木を生じ、海は魚鼈を育み、海水は月の満ち欠けに従っており、それらの中にあつて人類は万物に

抜きんでて聡明であります。一体誰が自分でこのように成ることができましようか。もし、自分で自分を作るものがあるとしたら、きつと先ず自分というものであつて、「それが」自分を作るはずです。しかし、すでに自分というものがあつたら、どうして「また」自分を作る必要がありましようか。もし最初に自分というものがなければ、自分を作るものは自分でないはずです。ですから、物は自分で「自分に」成ることはできないのです。

第二の証明。物は元來靈性を持ちませんが、秩序正しく存在しています。そのように秩序正しく存在させているものがあるに違いありません。たとえば、屋敷を見ると、前には門があつて人が出入りし、後には菜園があつて花や果樹が植えてあり、中央には庭園があつて賓客をもてなし、両側には寢室のための部屋があります。「そして、その屋敷は」下には太い柱があつて棟木と梁を支え、上には茅ぶきの屋根があつて風雨を防いでいます。このようにそれぞれが丁度良いような在り方になつていてこそ、家の主人が快適に住むことができます。ですから、屋敷は必ず腕の良い大工が建築してこそ出来上がるのです。また、銅版印刷の活字「によつて印刷された文章」を見ると、もともとは一つずつの文字ですが、つながることによつて一つの句ができ、「その句がつながることによつて」一篇の文章を構成しています。もし優れた学者がその文字を配列するのでなければ、どうして自然に合わさ（つて句や文章を作り上げ）ることができましようか。以上のことから次のことが解ります。天地万物には、すべて秩序正しく存在するためのきちんと定まつた道理が備わつていて、それは内実と形体をもち、増減することができないものです。

そもそも天は高く明るく上から「万物を」覆い、地は広く厚く下から「万物を」支えます。分ければ天地（乾坤）の両儀で、合わせれば宇宙です。星座「を載せているところ」の天は日月「を載せているところ」の天より高く、日月「を載せているところ」の天は火を包み、火は氣を包み、氣は水と地（の上）に浮かび、水は地の上を流れています。地は中央にあつて四季が運り行き、動植物を生み、水は魚や亀や水性動物を養い、氣は鳥や獸を育み、火は地上のものを暖めます。我々人類は動物の中から抜きんでて、その靈性は万物を超えて最高です。五常の徳（仁・義・

札・智・信)を備えて万物を司り、多くの骨を持って自分の体を支え、目で五つの色(青・黄・赤・白・黒)を視わけ、耳で五つの音(宮・商・角・徵・羽)を聴きわけ、鼻でさまざまな臭いを嗅ぎわけ、舌で五つの味(辛・酸・鹹・苦・甘)を味わい、手で「ものを」持ち、足で「地の上を」歩き、血液や五臓(心臓・腎臓・肺・肝臓・脾臓)〔「の働き」で生命を養います。〕

人間より下等な鳥や獣や魚介類となると、靈性を持たないので、人と違って自分で必要なことに対処することができません。ですから、生まれながらに毛皮や羽や鱗や甲羅などを備えて、衣服として体を覆います。〔また〕鋭い爪や尖った角、固い蹄や長い牙、強い嘴や猛毒などを備えて、武器として害を及ぼす敵に当たります。また更に、教えられずに自分を傷つけるかどうかということを判断します。ですから、鶏や鴨は鷹を避けますが、孔雀を避けようとはしません。羊は山犬や狼を怖れますが、牛や馬を恐がりはしません。鷹や山犬や狼が大きくて孔雀や牛や馬が小さいからではありません。それが自分を傷つけるかどうかを知っているからです。

また更に下等な草や木になると、自分を護り果実や種子を保護して鳥や獣の災いに備えるという知覚能力がありません。ですから生育する時に刺や皮や〔種子の〕外皮や綿を生じたりしますし、すべての植物が枝葉で覆われています。〔以上のように〕世の中のものを推しはかつてみますと、秩序正しく配置され、順序や法則があります。最初に最高の靈性を備えた主宰者がそれらの性質を付与したのでなければ、どうしてそれぞれの所を得て、天地の間にゆったりと存在することができましようか。

第三の証明。諸物が生まれる際の形体と性質について論じるならば、胎生や卵生、また種子に由るものなどがありますが、いずれも自分で自分を作るものではありません。胎や卵や種子もやはり一つのもので、必ず「それらを」最初に生み出すものがあってこそ、他の物を生み出すことができるのです。〔それらは〕果たして何から生じたのでしょうか。このように、必ず種類ごとの始祖に遡っていかねばなりません。〔そうすると、それぞれの種類のもの

は)その同類のものが生みなしたのではなく、最初に「それぞれの種類とは異なる」特別な種類のものが存在して、様々な種類の物を生みなしたので(「あることがわかりま」す。それが私の言う天主に他なりません」と。

9 中士が言った、「万物にはそれを生みなす始源者が存在し、先生はそれを天主と言われますが、それでは一体その天主は誰によって生みなされたのですか」と。

10 西士が言った、「天主という呼び名は、万物の根源を意味します。もし何かによって生みなされたのであれば、それは天主ではありません。始まりがあり終わりがあるものは、鳥や獣や草や木がそれです。始まりがあり終わりがないのは、天地や鬼神や人の靈魂がそれです。天主というものは、始まりもなく終わりもなく、万物の始源、万物の根源となるものです。天主がなければ万物は存在しません。万物が天主によって生みなされるもので、天主は何かによって生みなされるわけではありません」と。

11 中士が言った、「物が最初に生じるのは天主によるということとは、議論の余地がありません。しかし、今見てみると、人は人から生まれ、動物は動物から生まれます。すべての物は皆そうです。そうであれば、物はそれ自体で物となるのであって、天主とは何の関係もないようではありませんか」と。

12 西士が言った、「天主が物を生みなすというのは、最初にその物の始祖を生みなすということで、それぞれの始祖が生まれると、その始祖が自分で「子孫を」生んでいくのです。今、「あなたが言われる」物が物を生みなすというのは、人が人を生みなすのと同じで、天が人を用いて「人を生みなして」いるのであれば、人を生みなすものは天主でないことがありましようか。「物を生みなすのも同様です。」たとえば、鋸のこぎりや鑿たがねは器具を造ることができますが、どちらも大工が使うことによつて「できるの」です。器具を造るのは鋸や鑿であつて、大工ではないなどと誰が言えましよう。先ず物の存在原因について説明すれば、その道理はおのずと明らかになるでしよう。

物の存在原因について論じるならば、四つあります。四つのものとは何でしようか。始動因(作者)と形相因(模

者)と質量因(質者)と目的因(為者)です。<sup>(12)</sup>そもそも、始動因とは、その物を造つてその物とするものです。形相因とは、その物を象り、類別し、他の種類の物から区別するものです。質量因とは、その物の固有の性質で、形相因によつて規定されるものです。目的因とは、その物の目的や作用を規定するものです。この「四つの」ことは、仕事においてつぶさに見ることができません。例えば、車の場合だと、車大工が始動因、轆が形相因、木材が質量因で、人を乗せるためというのが目的因です。また、物を作り出すことにおいても見ることができません。例えば、火の場合だと、火を起こす「ための」基になる火が始動因、熱気や乾気が形相因、薪や柴が質量因で、物を焼いたり煮たりするためというのが目的因です。世の中には、この四原因をもっていないものはありません。四原因のうち、形相因と質量因の二原因は物に内在し、物の本質となります。陰陽と言われるものはそうです。始動因と目的因の二原因は物の外に存在し、物を超越しており、物の本質となりえません。

私が考えますに、天主は物の存在原因です。ただ、始動因と目的因と言いますが、形相因と質量因とは言えません。つまり、天主は渾然一体のもので、どうして物の部分となりえましょう。始動因と目的因という存在原因を論じるならば、卑近か高遠か、普遍的か個別的かの区別があります。普遍的で高遠なものは大きなもので、個別的で卑近なものとは小さなものです。天主は物の存在原因として、この上もなく普遍的で大きなもので、それ以外の存在原因は卑近で個別的で小さなものです。個別的で小さなものは、普遍的で大きなものに統御されます。そもそも両親は子供の「生まれる」原因です。父母と呼ぶと、卑近で個別的ですが、もし天が「万物を」覆い地が「万物を」載せなければ、「両親は」どうして子供を生むことができましょうか。もし天主が天と地を掌握しなければ、天と地はどうして万物を生み育むことができましょうか。そうであれば、天主はもとよりこの上もなく最上最大の存在原因であります。ですから、吾が方の昔の学者は、「天主を」すべての存在原因の最も初めにある存在原因としたのです」と。

13 中土が言った、「この世界にある物は、数も多く種類も異なっています。〔ですから〕一つのものから出てきたの

ではないと思われれます。ちようど黄河や揚子江がそれぞれ水源が別々にあるようなものです。今、天主は唯一、とおっしゃいますが、その理由についてお尋ねしましょう」と。

14 西士が言った、「物の個別的な根源はもちろん一つではありません。「しかし」物の普遍的な根源は「二つで、」別々ではありません。なぜならば、物の普遍的な根源は、万物がそこから出てくるところであり、万物の徳性を具有しているからです。「万物の」徳性が充満していれば、「他の物から」超然としており、これを超えるものはありません。もし、天地の間で二つの尊大な根源者が存在するのではないかと疑うならば、一体その二つのものは等しいものなのでしょうか。それともそうではないのでしょうか。もし、「その二つのものが」等しいのではないならば、必ず片一方は「他の物より」微小なものであり、その微小なものは普遍的に尊大な「根源」者と言うことはできません。普遍的に尊大な「根源」者とは、それ以上加えようのない、偉大で完全な徳を備えたものです。「また、」もし、「その二つのものが」等しいのであれば、一つで既に十分で、どうして複数ある必要がありますでしょうか。

それに、そもそも二つの尊大な「根源」者があれば、奪いあつたり滅ぼしあつたりしないでしょうか。もし、滅ぼしあうことができなければ、その能力には限界があることとなります。完全でこの上ない徳を備えた尊大な主宰者と言うことはできません。もし、奪いあい滅ぼしあうことができるならば、奪われ滅ぼされるものは、天主ではあります。かつ、この世の中の物は、極めて多く満ちあふれています。もし、一つの尊大な「根源」者がそれらを維持し保護しないならば、ばらばらになり、なくなってしまうです。音楽を立派に編成するのに、楽官の長が沢山の楽士を集めて完全な音楽を構成するのではありません、音響は絶えてしまうようなものです。ですから、一つの家にはただ一人の家長がおり、一つの国にはただ一人の君主がいるのです。二人の家長や君主がいれば、家や国は乱れます。一人の人には一つの体があり、一つの体には一つの頭があります。「体や頭が」二つあれば、こんな奇怪なことはありません。このことよつて次のことがわかります。天地の間には数多くの鬼神が存在しますが、唯一の天主が存在してこ

そ天地や人や物を創造し、常にこれを主宰し維持するのです。どうしてお疑いの余地がありませんか」と。

15 中士が言った、「ご高説を拝聴いたしましたからには、どうして天主が二つとない尊大真実な方だということを信じないことがありますでしょうか。ですが、どうか最後までお説を続けてください」と。

16 西士が言った、「この世の中で、蟻のように微小な虫でも、人はその性質の全てを知り尽くすことはできません。まして、この上もなく尊大な天主について、どうして容易に知ることができましょうか。もし人が容易に知ることができるのであれば、それは天主ではありません。古代、一人の王が天主について知りたいと思ひ、賢臣に尋ねました。賢臣は、『どうか一日帰つて考えることをお許してください』と答えました。一日経つて、『王は』また尋ねました。

〔賢臣は〕『もう二日したらお答えできます』と答えました。こうして二日が経つと、また〔賢臣は〕、『四日したらお答えします』と答えました。王は怒つて、『なぜお前はたわむれるのか』と言いました。〔賢臣は〕『私はどうしてたわむれたりいたしましょう。ただ、天主の道理は窮まりがありません。私が深く考えれば考えるほど、道理はさらに捉え難いものとなります。それはちやうど、目を見張つて太陽を見上げれば見上げるほど、益々真つ暗になるようなものです。ですから、お答えすることが困難なのです』と答えました。

〔また〕昔、西洋にアウグステイヌスという名の聖人がおりました。天主のことに通曉して、そのことを書物に著したいと思つていました。ある日、海辺を散歩しながら色々と思ひ巡らしてました。すると突然、一人の童子が砂を掘つて小さな穴を作り、手に牡蠣かきの殻を持って、海の水をその穴に流し込んでゐる姿に出会いました。聖人は、『おまえは何をしようとしているのか』と尋ねました。童子は、『私は、この殻で海の水を全部すくつて、穴の中に流し込もうと思つています』と言いました。聖人は笑つて、『おまえはどうしてそんなに愚かなのか。小さな入れ物で大海の水を全部すくつて小さな穴に流し込もうだなんて』と言いました。童子は、『あなたは、大海の水は小さな器で汲むことはできず、小さな穴が全て〔の水〕を容れることもできない、ということは解つてゐるのに、どうして

心を勞し、思いを患わせて、人間の力で天主の偉大な真理を究め、それを書物に著そうと思うのですか」と言いました。童子は、語りおえると見えなくなりました。聖人は驚いてはっとし、天主が天使に命じて自分を戒められたのだと悟りました。<sup>(13)</sup>

思うに、それぞれ類別されている物については、その種類によつて異同を考えれば、その性質が解ります。形や声がある物については、その姿や形を見て、その音や響きを聴けば、その実体が解ります。際限のある物については、こちらからあちらまで測量すれば、その形体が解ります。「しかし、」天主となると、類別することができず、万物を超越していますから、どの種類に引き当てることができましょうか。形や声がないからには、取り付いていく跡形もありません。その形体は窮まりないので、天地宇宙も果てとすることができませんから、何によつてその高遠かつ広大な際を測ることができましょうか。その実体や性質を示そうと思うならば、『いでない』とか『いがない』とかいう言葉で示すしか方法がありません。もし『いである』とか『いがある』とかいう言葉で〔定義したり、限定したりして〕示すならば、益々〔実体から〕遠ざかつてしまいます」と。

17 中士が言った、「そもそもこの上もなく『いである』『いがある』『いがある』(という存在の確かな天主なる)ものを、どうして『いでない』とか『いがない』という言葉で明らかにすることができましょうか」と。

18 西士が言った、「人間というお粗末な器では、天主の偉大な真理を載せることはできません。ただ、物は卑賤であり、天主はそうではないということが解るだけです。しかし、それが尊大かつ高貴であることを究め知ることはできません。ただ、物には欠陥があるが、天主にはないということが解るだけです。しかし、それが完全かつ長大であることをはかり知ることはできません。今、私が天主がどのようなものであるかをはかり示そうと思うならば、こう言うだけです。天でも地でもありませんが、高く明らからで広く深いことは天地に比べようもありません。鬼神ではありませんが、その神靈さは鬼神どころではありません。人ではありませんが、聖人の持つ聡明さにはるかに優つてい

ます。道徳ではありませんが、道徳の根源です。天主は、往くこと（生）も来ること（死）もなく、往き始めるところを説明しようと思えば、始まりがないと言わなければならない、来たり終えるところを説明しようと思えば、終わりがないと言うしかありません。また、その実体を推し量つて考へるに、それを載せることのできる所はありませんが、これによつて満たされない所はありません。「自らは」動かないで全ての動きの基もととなり、手も口もありませんが、森羅万象を生成変化させ、あらゆる生き物を教え諭します。その力は、壊されることも衰へることもなく、無を有に変へるものです。その知は、迷いも誤りもなく、はるか遠い昔のことや、はるか先の未来のことでも、面と向かつているように、知り得ないことはありません。その善は純粹で汚れなく、あらゆる善が帰着するところで、どんな小さな不善でも煩わづらいとなることはありません。その恩恵は広大で、止めることも偏らせることもできませんし、あらゆる所に及びます。どんな小さな虫や貝でも、その恩恵を受けます。そもそも天地の間のもので、善い性質や善い行いは、すべて天主から受けないものはありません。しかし、本源の一水滴を大海と比較するようなわけにはいきません。天主の福徳は隆盛で充足しており、盛んで行き渡つております。どうして、増し加へることができましようか。どうして、削り減らすことができましようか。ですから、「かりに」川や海の水を全て汲みつくし、浜の砂の数を数え、宇宙を充滿させることができたとしても、天主を完全に明らかにすることはできません。まして、それを説明しおへることなどどうしてできましようか」と。

19 中士が言った、「ああ、何と豊かなご高説でしよいか。説き明かすことのできないことを説き明かし、究め知ることのできないことを究め知るものです。私は、このご高説を拝聴して始めて根源に帰る大いなる道が解りました。どうか最後までお話を進めてください。今日はこの上あえてくどく問ひ質すことはいたしません。「明日の」朝、またお尋ねいたしましよ」と。

20 西士が言った、「あなたは聡明な方です。わずか聴くだけで多くを理解されます。私は何の努力もいりません。

ですが、以上のことが解れば、難しい点は解り易くなります。根本がしつかり定まれば、あとは容易に定めることができます」と。

【注釈】

- (1) 『論語』憲問篇に、「子路、君子を問う。子曰く、『己れを脩むるに敬を以てす』と。曰く、『欺くの如きのみか』と。曰く、『己れを脩めて以て人を安んず』と。曰く、『欺くの如きのみか』と。曰く、『己れを脩めて以て百姓を安んずるは、堯舜すら猶お諸を病めり』と」とあるように、儒学の根本は「修己」と「治人」の統合にあると言われる。朱子の「大学章句序」でも、古代の大学においては、「之れに教うるに、理を窮め心を正し、己れを修め人を修むるの道を以てす」と説いている。
- (2) 原文に「業」「功」とあるのを、ここでは「功業」と訳した。朱子学などと言う「功夫」で、学問・実践に必要な修養や努力のこと。
- (3) 「君子」は人格も学問も共に優れた有徳の人物のことで、「小人」はその反対概念。君子は理想的人物像を指し、孔子は君子の養成を教育目的とした。『論語』里仁篇に、「君子は義に嚙り、小人は利に嚙る」とあるように、君子・小人は対比的に用いられる。
- (4) 『易経』乾卦・文言伝に、「君子は徳に進み業を脩む」とあるように、儒教では徳の完成を目標とし、それを幸福(福祿)とした。
- (5) 原文には「靈才」とあるが、ここでは「知性」と訳した。以下に見える「靈魂」の属性と言える。この「靈才」の語のように、リッチは時折中国語としては熟さない用語を使用するが、訳では解りやすい言葉に言い換えた。
- (6) 原文には「神靈」とあるが、ここでは「靈魂」と訳した。「靈魂」については、第三篇及び第四篇で詳述される。
- (7) 「君子は理を以て主と為す」と言うのは、朱子学の基本的立場である。朱子学は、天理の窮明(格物致知)とその実現を学問実践の柱とする。
- (8) 原文は「陡斯」で、ラテン語「Deus」の音訳である。
- (9) 「良能」は、『孟子』尽心上篇に、「人の学ばずして能くする所の者は其の良能なり、慮らずして知る所の者は其の良知なり」とあるによる。因みに、ここに出る「良知」の語は、明末に中国で流行していた陽明学の中心概念である。
- (10) 地・水・火・氣(風)は、古代ギリシア哲学において、万物の四元素とされた。



- (11) 以上、五常・五色・五音・五味・五臓の表現は、五行思想の考え方による。
- (12) 以下はアリストテレスの四原因論に基づく。この考え方は中世のスコラ哲学にも継承された。リッチの訳語を( )内に示した。
- (13) アウグスティヌス(三五四―四三〇)は、ラテン教会の教父。「神の国」「告白」のほか多くの哲学・神学の著述がある。ここに引く話は、その生涯の有名な挿話の一つで、後世、多くの画家が題材として描いた。左は、その一つで、ペーテル・パウル・ルーベンス(一五七七―一六四〇)によって描かれた「聖アウグスティヌス」(二六三七―三九)である。(プラハ国立美術館展図録、毎日新聞社発行、一九八〇より転載)。